

子どものいる暮らし―男・夫・父

散歩道で教えられたこと

くわ
はら
乗原 昭徳



韓国からの電話

私には一九九五年に出版した『マー君の散歩道』という呑気な題名の著書がある。隣の家の三男のマー君（当時三歳八か月）と私の一〇か月の散歩の記録である。一九九八年の三月、その本を東京で

買って読んだという電話が釜山からかかってきた。この電話を契機に、六度にわたる釜山大学校付設保育園の訪問が実現した。また、この『マー君の散歩道』は、一九九九年にはソウルにおいて韓国語訳が出版されるにいった。

インターホンが仲立ち

一九九一年の五月二〇日、日曜の昼のこと、拙宅の玄関のインターホンが鳴り響いて、お隣の三人兄弟が遊びに来てくれた。一番下のマー君は保育園の年少児クラス、二番目のヒロ君は小学二年生、そして長男のナオ君は小学五年生であった。

幼児にとつて玄関のインターホンは、おもしろい遊び道具でもある。上の二人の兄は簡単にインターホンのボタンに届くのだが、マー君の手には高くて届かない。この日、私は庭にあったレンガを一つ、玄関外のインターホンのボタンの真下に置いた。

マー君には、ちょうど良い高さとなつて、つま先から手の指先までを一直線にして伸ばすと、どうにか人さし指の先がボタンにかかるのであった。この日から、わが家のインターホンのボタンは、マー君の冒険の対象となつた。その日のうちにも何度か鳴

り響いたが、月曜日からは毎夕のようにインターホンが鳴るのであった。

私も朝早く学校に出かけていって仕事を済ませて、夕方には家にいるようになった。それから数日間、インターホンを鳴らしてはマー君がやつて来て、わが家が上がつて遊んだ。特別な遊び道具が準備してあるというわけではない。マー君の家とはちがつて、隣の家の机の上の紙一枚、鉛筆一本、ホッチキス一個が、遊び道具になるのであった。このころ、マー君は母親の車から降りると、直接インターホンに向かつていたらしい。

初めての散歩

インターホンが鳴りはじめて五日目の、五月二十四日の夕方のことであった。

私は、裏庭で土運びをしていた。その時、玄関のインターホンが鳴つたのであった。マー君は慣れた

足どりで、二階に登っていく。私の方は、泥まみれの手足で家の中に入ることもかなわない。そこで私は、「きょうは、お外よ」と叫ぶことになった。この一声をきっかけに、マー君と私は家の近くを歩くことになった。初めての散歩である。

田んぼのそばまで行くと、水道の蛇口にとりつけられた青色のビニールホースの切れ端が転がっていた。マー君は、それを手に取ると、田んぼの水の中に入れてジャブジャブと掻きまわしはじめた。これがおもしろいらしく、しばらく遊び興じた。

私も大人としてのプライドがある。数日後、マー君のいないときに、ホースでジャブジャブとやってみた。水の抵抗があつたり、音がしたりして、けっこう面白いことを発見した。幼児の喜ぶ遊びが、生活の身近にあることを教えてもらうことになった。

さらに細い畦道を歩くと、大きな池の水面が見えた。なんと目の前には体長五〇センチメートルを越

える朱色の鯉と、紅白に黒の模様の鯉がぼっかり浮かんでいるではないか。私は指さしながら「あそこに鯉がいるよ」と小さくささやいた。するとマー君も、さも感

心したように「おるねえ」と、小さな声でささやいたのであつた。私がささやきかけると、マー君がささやき返す。第二に、幼児のつかう言葉の不思議さを教えてもらうことになった。

畦道に並行して流れ下る溝には、澄んだ水が流れている。マー君は足もとの草の葉をちぎって、溝に投げこんだ。そして「舟じゃ」と叫びながら、こんどは流れ下る草の葉の舟を追いかけた。池からの流れ込みでは、浮き沈みする草の舟を眺めた。投げ込んだ草を舟と見立てて楽しむ「遊び事」のおもしろさを私も体験することになった。

一本のホースの切れ端、二匹の鯉、投げ込んだ



草。この三つの物を使って楽しむ遊び方を、私は三歳八か月のマー君から教えてもらったのであった。

それは一九九一年五月二四日のことであった。その日が、マー君と私の最初の散歩の日であり、「散歩記念日」となった。二人は、九年後の今でも散歩に出かけることがある。

散歩道で教えられる

甲羅の長さが三〇センチメートルを越える巨大なアカミミガメを捕まえたり、種々の色どりのチョウを見て、たくさんのことを教えられた。また、マー君が小学校に行くころには、二人で数々の珍しい出来事にも遭遇した。

① 広い池の水面に突き出た配水用のはしごの手すりに、魚の小さな鱗が付着している。これは、カワセミが小魚を捕った直後に、手すりに打ちつけて

殺して食べた跡であった。

② 池に棲息するザリガニは、夕方になると池から這い出て、夜中のうちにいったんは溝の上流に登り、明け方には下流にくだっていく。多い時には一晩に五〇匹が下っていく。

③ うららかな春の日の午後、池のカメたちはネコヤナギの幹や枝で甲羅干しをする。

④ この散歩道ではヘイケボタルが飛ぶ。成虫からは予想すらできないホタルの幼虫も発見した。一〇メートルばかり離れた別の水系では、大きなゲンジボタルが乱舞する。

⑤ 冬の日、体長四三センチメートルもある巨大なウシガエルを捕獲し、近所の人に見せて歩いた。

⑥ 池のそばに座って二人で話していると、空からウスバキトンボの死体が降ってきた。これは、獲物の食べ方に慣れていない若いツバメが食べ損なって落としたのである。

⑦最近、この池の下流の溝が、シジミ貝の群生する
住み処であることを発見した。

毎年、夏から秋に群れ飛ぶ茜色のトンボはウスバ
キトンボ（薄羽黄とんぼ）であった。これはマー君
が気付いて、後で私が教えてもらった。また、マー
君の疑問に答えたり、二人で調べたりする中で、私
はたくさんの自然の事物の名前や性質などを教えら
れた。

散歩に参加した子は五〇人

散歩がはじまって満九年が過ぎ、回数も七〇〇回
を越えた。マー君と私がいつも一緒に散歩するもの
だから、ある女兒は私を「マー君のおじちゃん」と
呼んだこともある。

この散歩が満九年を迎えようとする二〇〇〇年の
五月二二日（日曜）のこと、中学一年生となった
マー君と久しぶりに散歩をするようになった。私の

方から電話をかけて都合を尋
ねた。「散歩に行かないかね
え」との誘いに、マー君は
「いいですよ」と大人びた丁
寧な返事をした。礼儀正しく、すっかり大人の言葉
であった。

私は帽子をかぶり、メモ用紙をもって外に出る。
時刻は一四時二〇分、気温は二七度である。初夏の
太陽がまぶしい。マー君宅のインターホンを鳴らす
と、マー君が出てきて、「長靴をはこうね」と言っ
た。乗原宅の玄関の虫とり網をマー君が持った。

池の土手は、初夏の雑草の緑におおわれていて、
その中にピンクのアザミの花、黄色のウマノアシガ
タの花がのぞく。その日のマー君との散歩で出合う
ことになった物は次のとおりである。*印は、私の
目の前で、マー君が虫とり網で捕獲した物である。

ヒメウラナミジャノメ*、アゲハ*、ベニシジミ



、ツマガロヒヨウモン、ヤマトシジミ、クロアゲハ、モンシロチョウ*、キチョウ、モンキチョウなどの蝶の仲間。

シオカラトンボ、ムギワラトンボ、コオニヤンマ、ハラビロトンボなどのトンボ類。

アオサギ、ツバメなどの鳥類。池の周囲の岸辺は、キシヨウブの花盛りである。

マー君が水の少なくなつた池の底をみて、「カメが歩いた跡がある」と教えてくれた。よく見ると、カメが腹をこすつた幅の広い跡が一本だけ、池の中央の方向に伸びている。

二年前のこと、マー君宅の向こう隣にミカとジュリの家族が引っ越してきて、すぐに散歩に加わつた。最近では夕方などに、ミカ（小一）・ジュリ（幼稚園年少）・ナミ（小二）たちを相手にボール遊びや自転車遊びをしているマー君の姿を見ることがある。

そのほかに、マコト・カナ、ユウ・シヨウタの各きょうだい（四人とも幼児）や、マイ・コマサきょうだいと遊び仲間の兄弟（四人とも幼児）、それにタエ（小二）・チエ（保育所年長）・リサ（小一）が散歩や遊びに加わることもある。

マー君との散歩が始まって満九年になるが、その間に一度でも散歩に加わつた子どもは五〇名を越える。散歩のメンバーは変化するが、これから後も散歩は止みそうにない。

（山口大学）